

第四章 開学



團伊玖磨作曲の学歌は、俊馬先生が建学の精神を歌詞に盛り込んでいる。この原本は本学に大切に保管されている

1 憂国の至情

成し遂げねばならないこと

『夜更け、隣近所で鳴らすラジオの音も、遠くを走る市街電車の響きも、すっかり無くなって、天地万物寂として静まり返ったなかに、読み耽った書籍から暫し注意力が解放せられた時、ふとカチカチと時を刻む柱時計の音を聞いて慄然とすることがある。一瞬の休みもなく流れ行く時間というものを、まざまざと感知するからである。

流れ行く時の刻みを如実に意識せしめるところの時計の音は、一瞬一瞬と生命そのものを刻む音であり、一步一步死に向かって運び行く^{かせ}杖の音であり、また冷たき壁に封じたる棺のなかに隠れ住む時の老骨、きしきしと数囁む音の歯ざしりである。

それにもかかわらず、これから成したいこと、成さねばならぬことは、今までに成し、または成し得たことよりも遙かに多い。いな、他人は知らず、少なくとも私だけについて言えば、わが人生の前途に残された時間が短くなればなるほど、せねばならぬと思うことは、いよいよ多くなるようにすら感ぜられる。さればこそ、冷たい時計の音が、数囁む音の歯ざしりとも聞こえるのであろう。(荒木俊馬著『狐狸窟瓢論』第四部「脱線時間談義」)

成さねばならないこと。それは大学をつくることであつた。紛争に明け暮れていて、日本の教育はどうなるのか。次の日本を担う憂国の青年指導者を育成しなくてはならない。そうした思いを確かめるかのように、大学づくりの話が持ち込まれた。

『京都産業大学創立に着手したのは昭和37年秋以降のことである。全く私ただひとりで走り回って運動していたので、非常に忙しく寝食を忘れるほどであつたので38年3月まで全然、日誌もメモもつけていない。以下は、妻京子の備忘録をたよりに後年、つくりあげたものである』と昭和49(1974)年6月の俊馬日記にある。

大学ができ、順調に運営され基礎の固まった時点での懐旧談として、大学づくりの苦闘が語られている。大学教授を永く務め、教育者として、研究者として、豊かな経験を持ってはいたが、大学づくりは別ものであつた。大学設置基準の存在はそのとき意識の外であり、基準に基づく複雑な手続きが必要であり膨大な書類が要求される。ヒトモカネもいる。教育への情熱だけでは、とうてい実現を期すことのできない険しい断崖が前途に待ち受けていた。

混乱した日本の文教界で、日本の将来のために先生は自分の意図するような新大学を創設することの必要さを説いて回つた。大学の経営、組織、



京都産業大学の誕生直前の鞍馬街道と本山(京都ゴルフ場越しに写す)

教科などについて友人たちからいろいろ示唆を受けて、大学づくりの構想が具体化して行った。

昭和37(1962)年、友人の北部邦雄と出掛けた京都府福知山市の集会で先生は、地元の京都府議会議員から耳よりの話を持ちかけられた。福知山市内に約2万坪の区有地がある。大学敷地として提供してもよい。その隣接地に数千坪を所有している土建業者も、大学建築請負を条件として寄付する意向である。かつては福知山連隊が常駐して、賑わっていた地域の活性化策として行政も全面協力を惜しまない、というのであった。

大学の設立にあたっては「広大な敷地」「巨額の設立資金」「教員集め」のあと「文部省のきめ細かな審査」がある。いずれも難題であるが、なかでも土地高騰の始まっていたこの時代、十分な敷地の確保が最も重要であった。それが解決されるというのであれば、大学はできる。

『私をして大学創立に向かわせたきっかけであった。無我夢中で大学創立の計画と準備に取りかかった』と先生は京都産業大学報に簡潔に記しているが、取りかかってみると、次から次へ難題が持ち上がった。ひとつ解決すると、次にまた解決の方法すら思い浮かばない新しい事態が起きて来る。構想をつくっては崩し、あるところまで形ができると、崩れて行く。砂の上になにかを建てて行くような危うさのなかで先生の苦闘が続いた。『私の大きな夢として実に楽しい時期だった』という述懐は、見事につくりあげた者だけに言えることであった。

力強いパートナーが現われた。知人の紹介で、

小野良介(のちに京都産大理事長)が協力してくれることになった。経理事務に詳しく、しかも山陰の鳥取県倉吉市で高等学校を設立して順調に経営していた。複雑な設置手続きをひとつひとつ解きほぐして文部行政と折衝した最近の体験がある。それは貴重であった。教え子の大学教授たちも、力になることがあればと集まって来た。昭和39(1964)年4月に開学(京都産業大学の開学は昭和40年である)しようというのであれば、38年9月末日までに学舎、実験器械、書類をつくりととのえて申請し、明けて2月中に文部省審査、認可決定のスケジュールが最短であるという。

急がねばならない。もう38年5月に入っていた。開学まで1年を切っている。まず大学用地である。小野は早速、福知山へ向かい、登記簿を調べ、地元の動向を探った。すでに区民大会が開かれて区有地の無償寄付は決まっている、というのは朗報であった。気にかかるのは、建設会社社長が提供を約束していた隣接地数千坪であった。個人所有でなく、会社の所有地と判明。それでは、無償提供は会計上は容易にはできないという見方が強い。しかし、数日経って連絡が来た。市議会で大学誘致を決議する、市長が上京して文部省の意向打診に動きたい、という話。理事、教員の陣容固めに走り回っていた先生は5月末、福知山行。地図を手に現地調査して大学敷地としては適当なことを確認した。候補地の区長や有力者らの大歓迎。直ちに寄付の手続きを取るように要請、敷地問題は一件落着 そう思い込んだのは早合点であった。

いよいよ大学ができそうだ。そうなると、ひと



先生はやぶ蚊に悩まされながら最適の大学の敷地を探した

口かんで金儲けしようという手合いが現われるのは常のこと。無償提供の話も怪しくなる。他に買い手が現われたから高値で買ってほしいという声が飛び出す展開をみて、先生は決断する。大学づくりを金儲けの対象とするような考えが見られるようでは、良い大学は創れない。関係している人たちのなかから、これまでの話とあれこれ食い違う要求が出て来ることに堪えられない。「他に買い手があれば、どうぞ」。敷地予定地について、先生の返事は福知山での新大学を断念した趣旨であった。

開学へ始動

福知山での設立は白紙に戻ったが、大学づくりには先生は走り出していた。覚悟はしていたものの財布からお金があつという間に消えて行く。大学成立にあたっては、母体になる学校法人がすでにあるのが一般的である。潤沢かどうかは問わないにしても、一応の資金を用意してから申請するものである。それを学校法人と大学と一緒につくろうという。

会社の取締役にあたる、理事の就任取付けひとつをとっても、電話一本で済むわけではない。いくら親しい間柄であっても直接に会い、要請し了承を得る手順が欠かせない。交通費、事務費、手土産代、仲介の労をとった人への接待もある。そ



大至急の学舎づくり。ブルドーザーが、山肌を削った(昭和39年)。このあと緑に包まれたキャンパスづくりへの努力が重ねられた

ういった費用が、羽根が生えたように出て行く。他人まかせにできないから時間が足りない。手分けして走ってくれる人がほしい。強力な資金提供者の支援がいる。

あの荒木博士が本気で大学づくりに奔走している。情報が駆け巡った。Q生命保険会社から協力話が寄せられた。3億5千万円程度の資金を出すという。悪くない話である。先生の仕事を手伝ってくれていた自由文教人連盟関西本部の元事務局員が打合わせに出掛けて「話にならない」と怒りで顔を真っ赤にして帰って来た。保険会社の条件は、大学名を「Q大学」として保険会社系列であることを明らかにしたうえで、保険会社社長を学長に据えること、入学生全員に自社の保険を加入させること、全資金の返還と期限を約束することなどの条件を示したという。『大学を何と考えているのか。われわれの大学は、学長が理事長を兼ね運営は他から何らの拘束も受けない。それによってこそ完全なる大学の自治を守ることができる。だから大学そのものが同時に経営者でなければならぬ。この点をいささかなりとも譲歩はしない』先生の信念である。わが理想の大学をつくる。現実のために理想が崩されてはならぬ。

国有林

毅然とした態度は、いつに変わりのない先生の姿であったが、敷地がなくては大学はできない。用地の確保が難航を始めたとき、先生の頭に閃くものがあつた。「区有林」からの連想である。

先生の趣味は、絵画、書に巧みであり、音楽、映画、演劇の鑑賞に広がっている。そのひとつに山登りがある。自然が好き、山が好きで、岩石に詳しい。大谷大学では天文学のほかに地質学、鉱物学を講じていた俊馬先生である。至るところに国有林があつて、意外なことに市街地の近辺にも点々として国有林が存在していることを熟知していた。先生の悩みを一挙に解決する天啓の妙案は、国有林を借りて造成し、そこに大学をつくることであつた。

思いついたらすぐ行動に移るのが先生の流儀である。どのような筋を通して、いかなる手続きで、どんな条件を揃えたら払い下げが可能になるか。さて具体策は、となると全くの未知の世界である。幸いに、行政についての知恵を借りる知人は多かった。すぐに上京して懇意の衆参議院の議員を訪ねた。『参議院議員会館に源田実(参議院議員)を訪問、農林省林野庁長官より大阪営林局長への紹介状の件依頼』(昭38.6.3 俊馬日記)のあと大阪営

林局や京都営林署を訪ねて、国有林の地図をみせてもらい、まだ貸与願も出していないのに、候補地の踏査を始めた。

日本の歴史を刻む洛中の近くが良い。大阪・高槻市の名神高速道路沿いや、宇治の国有林を調べた。右京区の笹寺付近に点在する候補地は、イメージに合わない。京大演習林に接した左京区幡枝は、工事用の車の侵入口を造るあたりが私有地でふさがっていて、早急な工事開始を期待できない。京都営林署で写させてもらった、候補地を示す赤印には、次々にバツ印が加えられて行き、ついに洛北の神山^{こうやま}国有林だけになった。

昭和38(1963)年盛夏、先生は鞍馬街道の原峠(いまの京都産業大学正門前)に着くと、北側の神山へ山道を登った。『上賀茂地区担当事務所に技官を訪ね、上賀茂候補地一帯の地図を写す。京大上賀茂地震観測所と背中合わせの山地を踏査』。(昭38.8.6)『神山国有林及び本山^{もとやま}国有林境界線視察』(8.14)『東一条川端よりバスで神山下車。神山国有林(道路の北)を実地調査。路を間違えて西部の国有林外の松林の丘をさまよう』(8.16)

ついに、見つけた。『東一条川端からバス。二軒茶屋の国有林』(8.18) ...ここしかない、と思い詰めた。上賀茂神社の北の柵野は、広々として穏やかな表情であった。国有林が私有林と混じり合っているが、大阪、奈良のような深い谷があるわけでもない。何よりも平安京造営にかかわる賀茂社ゆかりの地であることに、神仏への思い入れの強い俊馬先生は魅かれた。

『神山国有林(道路の北)』という記述を読んで、オヤと思うが、実は先生が初めに敷地として目をつけたのは、いまのキャンパスとは鞍馬街道を隔てた北側の林。現在の総合体育館の建っている場所よりもずっと北方の山林であった。

神山国有林を調べたとき、先生はこの地域をすぐに気に入った。山の頂き付近は意外に平坦で、工事や通学の自動車道も取付け易そうである。しかし、躍る足取りで京都営林署へ貸与について問い合わせると、先生の踏査したところは杉の苗木を植えたばかりで造林中であり、あと30年間は貸したり払い下げの対象にならないという。「でも南側の山(本山)なら貸与の可能性がある」と耳打ちしてくれた。

真夏、それも京のことである。手拭いを首に巻き、作業姿勢でヤブカを追いながら、雑木をかくぐって、本山の候補地を歩き回った。深い谷がふたつ、候補地のなかに刻まれていたが、土質は柔らかで、巨岩が地中にあちこち埋まっている様

子はない。ここなら工期も急がせられよう。神山を仰ぎみる地であることも嬉しい。

昭和40年春の開学を前提にして逆算すれば、この候補地を逃せば、もう大学はできない。豊かな自然も魅力であった。緑のなかで学問と教育に専心できる。洛中からも意外に近いではないか。

『本山13区国有林を建学の地とする』。昭和38年8月21日、先生はそう決めた。

まず農林省から国有林を借りないと、なにも動かないのである。貸与願を提出した。夜汽車で上京し夜汽車で帰洛、のあわただしい東京行が続いた。暮れも新年もない。永年にわたって記して来た「俊馬日記」も途切れがちになった。やがて待望の許可がおりた。

「本山の国有林を貸与する」。電話で伝えてくれた農林省の幹部は「正式許可(昭和39年1月27日)の前であっても造成工事に取りかかって差し支えありません」と親切につけ加えた。

開学にかける先生の思いをしっかりと受け止めた対応であった。



わが理想の大学をつくる。先生は祈る思いでクワ入れ式に臨んだ(昭和39年9月5日)

2 建設へ

資金難

次はカネであった。『おやじは知恵はあったが、カネはなかった。月給は本と酒に消えて行った』と長男雄豪の話である。戦前は京都帝国大学教授、高等官一等、いまも正四位勲三等であるといったところで親譲りの資産に恵まれていたわけではない。膨大な蔵書。わずかな書画骨董。それに吉田中大路の自宅。それが全財産。俊秀で著名な教え子が全国に散らばってはいても、これもカネには無縁な、世俗離れした天文学者たちである。政治の世界にいる仲間は、献金をあてにはしてもカネを出してくれる側ではない。金融機関の対応は渋かった。

資金難が襲いかかっていた。翌年の開学を控えた昭和39(1964)年、先生の苦闘を知って、小額だが心の籠った浄財が寄せられるようになった。戦争中、先生が校長を務めた京都府の物象教員臨時養成所の教え子である婦人が夫と一緒に訪ねて来て、お役に立てて下さいと20万円を差し出した。教え子の龍谷大学教授から15万円。財務担当の小野良介とともに捧げ持つ面持ちで受け取り、すぐに銀行へ定期預金。ほかからも浄財が入ると、その足で定期に入れた。数日後にはその預金を担保に金を借りて支出に充てる日々。1月末、大谷大学へ辞表提出。「先生、大学づくりは素人にできるものじゃない。このまま定年までお勤めになったら」と、苦勞を買って出るような俊馬先生の姿を見かねたのか、事務局長が引き止めたが、もう走り出していた。奔走しては授業が思うにま

かせない。それは学生に申し訳ないことである。それに、僅かにしても退職金は現金である。一刻も早く入手したい思いもあった。

2月に入ると、知人の紹介で骨董屋がやって来る。思い出の残る品々だが、背に腹はかえられない。辛い思いの先生を前に、予測とはケタ違いに安い値段を並べる骨董屋に怒りが爆発。『足下をみて話にならず追い返す』(昭39.2.23 俊馬日記)。保守人脈、言論人仲間の知己も、金の話になると表情が変わる。天下国家を論じるとき先生、先生と丁重に應對してくれた言論人仲間のひとりも、留学時代にドイツで買った大切なエッチングに払ったのが、なんと2万円。淋しい思いに沈んだ先生であった。

京都商工会議所に首脳を訪問、大学設置の支援を要請、その場で断られた。『恐らく寄付金をおそれた為ならむ』(昭39.3.11)。

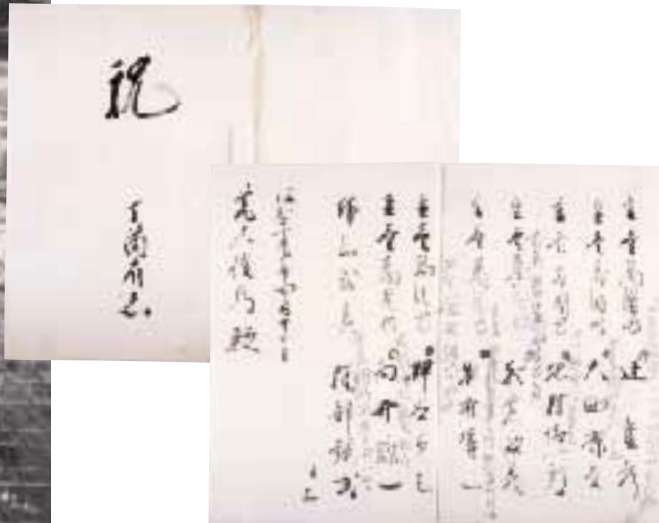
支援の輪

60年安保から70年安保へ、学園紛争の嵐を前にした昭和38年、39年は高度経済成長への道を、わが国がまっしぐらに進んで行く時代。18歳人口が増え続けていた。高等教育機関への進学率は急上昇、受け皿としての私立大学、短大が次々に誕生していた。中学校、高等学校をもつ学校法人は、大学、短大をつくって、生徒たちの進学熱にこたえようと努めた。

洛東の東山学園は、仏教系だけに温和な校風でスポーツや文化活動で地道な人気のある中・高等学校を運営していたが、このころは大学を独自に



学舎第一号の本館づくりがツチ音高く始まった(昭和39年)



先生と同じ干支の友人たちの集い「丁酉会」からは、楠部彌弌(文化勲章)ほかの皆さんの心のこもった建学祝いが贈られた

つくるか、あるいは既設、新設の大学と提携するかを選択を検討していた。東山学園長の藤原弘道は僧籍をもつ敏腕の学園経営者であり、京都産業大学設立の動きにたちまち興味を示した。俊馬先生と話し合っ、教育にかける情熱を正面から受け止めた。小野の財務計画の緻密さに信頼を寄せた。5月の子供の日の翌日に来て2週間後には、全面支援を約束。まず1,500万円の融資が決まった。推薦入学を公正な基準によって受け入れてもらえればよい、という。大学に合否についてはまかせるとまで言う。それは教育者として当然とはいえ、理想の大学づくりに燃える俊馬先生にとっては嬉しいことであった。ぼつぼつと資金は集まっていたが、藤原学園長の協力で、当面、資金づくりから解放された。雄豪の友人である豊橋市の眼科医、朝岡唯夫からも無担保期限なしの300万円の融資があるなど、文部省との折衝に全力であたれることがうれしかった。

6月1日、京都の千代田生命ビルの一室(京都市中京区烏丸通蛸薬師角)に大学設立事務所を置いた。机、椅子などが運び込まれた。電話局の係員が電話機を持って来る。妻京子の知人が、系列の千代田火災に勤めていて、その臨時雇の社員だった山本道子を推薦され、職員第1号として直ちに雇う。

『京都府議会議長と会談。山本道子に簿、紙屑箆を買いにやる。午後、清永、芝原(いずれも教え子の教授たち)来宅。昼過ぎ新聞記者の来訪。リプトンに案内してビール。応接セット届く。6時、憲法改正促進の会合に出席、大石義雄の講演。』
 『火事場みたいな騒ぎのなかで俊馬先生は朝早く出勤、深夜まで働き続ける。次女みほしの同級生の速水都も職員第2号として働き始めた。』

着工の日

『朝、洋服仮縫い(昭39.2.11 俊馬日記)とある。官庁回りに、地元の挨拶。学生の募集も近い。古びた背広の大学オーナーでは信用も得にくからうと、久しぶりの新調。だが、次の難題が控えていた。建築工事が難しくなったのである。』

建築に取りかかるには、京都府と京都市役所の許可がいる。なにしろ古都の緑をいったん剥ぎ取って学舎を建てようというのである。土木、建築、風致、治水、緑化といった、さまざまな面で行政の許しがいる。工事の設計書や現状変更願を出さなくてはならない。国の貸与許可とは別に乗り越えるハードルは高い。京都府の態度は固かった。風致委員会で、本山に大学を建てるなどもつてのほか、という風致委員(京大教授)がいて緑地の現状変更を認めない。京都市からも許可する前に工



大学設立事務所でも忙をきわめる荒木先生(左)と、自宅を事務所にしていた頃の名刺

事に取りかかろうとしているのは、違法行為だと警告書が送られて来る。そうはいつでも工期は迫っている。文部省の認可を得たときに、せめて建物の外観はできていないようでは、どうにもならない。当時の京都府は革新府政であった。保守系の論客とみられていた先生をつくる大学への風当たりが強いのはやむを得ない面があったかも知れない。そこは理解しながら、京都府と折衝を重ね問題を解きほぐして行くのであった。

後日、といっても開学前までの間に、先生の意図する大学づくりをわざと妨害するために、期限切れを狙ったという意外な話が先生の耳に入った。知事の関知しない段階で、ことが動いたようであった。幸いに、四囲の温かな支援で、綱渡りのように大学設立に漕ぎつけた。だが、もしも恣意的に行政の許可が延ばされて、その結果、大学づくりが白紙に戻ったとしたら、先生の怒りは激しかった。

『京都産業大学が立派に育っていくこと。輝かしい発展の姿を見せることが、私のいわば仕返しである』。京都産業大学報で先生は記している。薄汚い妨害劇を演じた連中の遙かな上空へ、先生の心は駆け上がって行ったのである。

心ない妨害をよそに地元のひとびとは優しくかった。昭和39年2月8日には、柘野の公会堂に三宅一郎(のちに京都産業大学監事)をはじめ地元の有志15人と会合を開き説明したところ、全面的な支持を取りつけることができて感激した。

建設工事にあたるのは藤田組。着工にあたっての保証人は、雄豪の馬術の支援者である丸善石

油・元社長の和田完二、東山学園理事長の藤原弘道、そして小野良介。先生の理解者たちであった。開学まであと、1年である。

本山のキャンパスはいま、洛北の緑のなかにある。風致地区の自然に溶け込んでいる。開学のころ、学舎ビルを建て、道をつけるために山膚を剥がしたから赤い土が露出して景観に打撃を与えた時期があった。緑のキャンパスに見事につくり変えたのは、開学時からの教授であった上田弘一郎(京都大学、京都産業大学各名誉教授)の指導の賜物であった。上田教授は竹の研究の第一人者であり、俊馬先生から景観問題解決の大役を望まれて動いた。本山の大地は、やせた土壌である。少ない栄養分でも、ぐんぐん大きくなるマツ、ヤシャブシを植えた。すぐに美しい花を咲かせるサツキ、ツツジ、エニシダも数万本。手入れがいるけれども古都の大学としての風格をあらわすサクラ、メタセコイヤ、タケも選んだ。あるとき、急傾斜の岩場に、ホースで花の種子と肥料、緑の着色剤の混じった水を吹きつけている上田教授らの姿があった。いま、本山の一角は四季の樹々と草花に彩られ、美しい自然をまとっている。開学のころの緑化作戦が見事に完成の域に達したといえよう。

設立申請

発起人、理事候補、それに教員集めも難物であった。言論人仲間の京大法学部長、大石義雄。独自の憲法論を展開して譲らない大石は、日本伝統の精神風土の尊重を説く先生と波長が合った。自然科学系の教員組織については熟知している俊馬



キャンパス増設の構想を練る荒木先生



わが子とともに建築の現場を見回った先生(右端)

先生は、法学系については一切をまかせた。大石もまたいったん引き受けたからには期日までに充実した陣容を揃える実力と心構えの持ち主であった。経済学系についても、心強い仲間がいた。滋賀大学経済学部長も務めた石田興平(経博)は、妻京子の妹婿で親しい間柄。温厚篤実な経済学者として、教員集めには適材であった。

発起人と理事候補選び。それは俊馬先生の仕事であった。その顔触れによって学校法人と大学の性格が決まる。その構成は大学の格を示し、建学の理想を体現する力そのものである。人選の経緯のなかに、先生の見方が浮かび上がっている。先生の政治に対する認識を知ることできる。

短期間に設立の認可を得るために、政治の力を借りた面がある。官僚組織を動かそうとすると、力を発揮した。しかし、実現したあと、先生は、設立に協力を得た政治家に感謝と尊敬の心をいつまでも忘れなかったのではあるが、大学運営の場に政治家の意向が入り込むことのないように配慮を重ねた。大学はどんな力からも独立していなくてはならない。建学の理念を守って、それを時代の風のなかに反映して行かねばならない。どのような方針を、それぞれの時代に、打ち樹てるのか。それは純粹に大学そのものが決めなくてはならない。申請時の発起人、理事構成に、政治がらみの人たちが少なくないが、開学数年のうちにすっか

り政治色が消えて行く。先生の気持ちを知って、学外からの応援に回ったのである。先生はいつとき、政治の世界に接触はしたが、本質は根っからの大学人、教育者であった。

教授陣には、優れた顔触れがそろった。数学界の権威である、大学時代の恩師の松本敏三から教授就任の快諾を得た。京都帝国大学時代の同僚のひとり、定年間近でほかの大学に再就職を決めていたが、先生のとて要請を聞くと、その場で教授就任承諾書に笑顔で押印し、荒木大学ができたなら就職先に断りの電話を入れるからと言ったうえで「新設大学、一緒にやりましょう」と励ましてくれた。

2 学部 3 学科

2学部3学科だけの発足に絞った理由については、先生の思い出話が大学報にある。それによると、文部省ともたびたび打合せて、助言を聴き、大学設置基準を研究したうえで学校教育法第4条による大学設置認可申請書の作成に取りかかった。初めの計画では、法経、理工の2学部を予定した。しかし文部省は複合学部に対し難色を示したという。

そこでまず経済学部経済学科、理学部数学科、物理学科の2学部3学科に限定すればどうか、と打診したところ、問題はないという感触が得られたらしい。建学にあたって、先生は、経済大国と



開学直後の京都産業大学全景。昭和41年4月、学部増設にともない国有林の払い下げを申請した(点線枠)



開学の頃の本学正門付近。看板のあたりが現在の守衛所

して成長し続けている日本の国の将来を担う経済人、それから独創的な科学者、技術者の育成をめざしていた。

だから少人数であっても筋肉質の大学で発足する。複合学部にこだわることはなかった。時間も切迫して来た。文部省の大学学術局から大学の設置認可を得ること、管理局からは学校法人(寄附行為)の認可を同時にもらわなければならない。必要とされる書類は膨大であった。大学づくりの窓口で論争を重ねる余裕はもう、なかった。

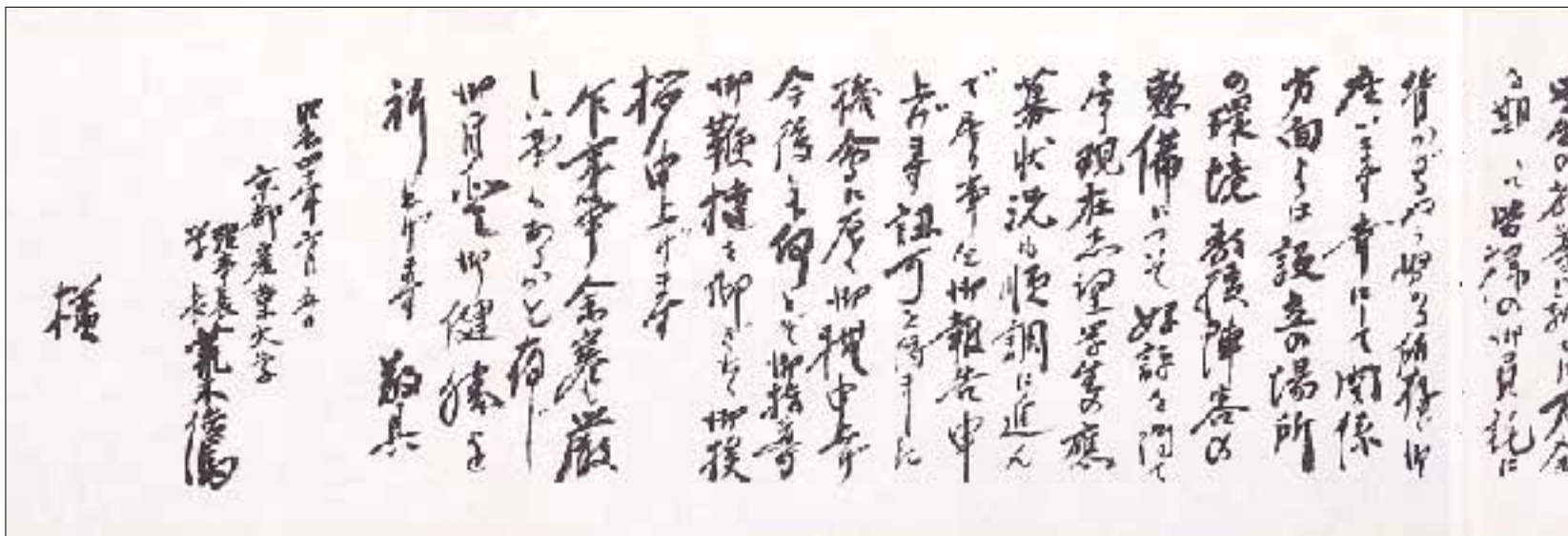
細々とした、しかし重要な約束ごとが要求された。学舎等については、開学時に一学年の授業に差し支えないように完成していればよいのであるが、教員組織については一般教育(教養課程)の三系列に主任教授をひとりずつ置くこと、第一外国語(英語)に主任教授を、さらに第二外国語の独、仏、露、スペイン語についてもひとりずつ専任の教授を置くこと、専門課程であっても学部長となるべき教授および学科主任教授は、開学のときに就任していなくてはならない、などであった。

教員については、就任承諾書、履歴書、研究業績書、在籍している大学から京都産大への転任承諾書がある。但し、この承諾書については定年退

職後のことであれば、大学の定年規程文書があればよい、などというのであった。専任だけでなく非常勤の教員についても全員の捺印がいるという。『手紙ではなかなか押印して送り返してくれない。ひとりひとりを回って、訪問せねばならなかった。教養部は荒木、経済学部は石田と大石、理学部は荒木と芝原(鎌一・龍谷大学教授=当時)などが飛び回った』と記している。

とにかく認可までが大変であった。朝9時出勤、帰りは深夜まで。日曜日も『職員通用門から事務所に入れてもらう』日々。『9時出勤、書類作成、仕上げ。みほしも手伝い。徹夜(昭39.9.28)』『午前10時、小野、山本、速水と伊丹空港。日航機にて東上。書類の整理、不足の分は至急、恒星社に印刷させ徹夜して書類一切をそろえる(9.29)』『午前10時、時間ぎりぎりに文部省に駆けつけて書類提出(9.30)』「ぎりぎり」というのは、昭和40年度開学のタイムリミットであったということ。先生にとって、大学設立の夢を消さないための期限であった。

書類は通った。昭和39(1964)年11月10、11日の両日、大学設置審議会委員の実地検査が始まった。正念場であった。新設大学にふさわしい環境かどうかの厳正な審査がある。関西学院大、同志社大、東京教育大、静岡大の各学長に文部省の係員二人。工事の現状、図書館の内容、器械器具などの検査、申請書類についての質疑があった。旧知の学長たちであったが、審査に私情を加えない厳しさが表情に示されている。先生は冷や汗を流していた。開学の時点で唯一の教室棟になる四階建本館の建築が遅れていた。審議会の検査までに全容ができていることが条件であったのに、二階



大学設置認可の喜びを、世話になった方々に知らせた書状

部分までしか骨格ができていない。仕方がないから藤田組の工事責任者の知恵で、三、四階にあたるところに足場をつくり、ネットで覆いをして「四階までコンクリート打ちした」体裁をつくらせていたのである。

「よさそうですね。」検査の終了を告げて講評に移った審議会委員たちの笑顔を見た。「武士の情だな」と心中、落涙する先生であった。委員の学長たちの信頼を裏切ることのない大学づくりを改めて誓ったのであった。

やがておおみそか。『晴。みそら、靖素をつれ

て、大学建築現場を見物、現場作業員は休み』と日記にある。息づく暇のない混乱、喧騒の年が暮れようとしていた。言論人として尊敬していた人が、大学設立への助力を拒んで去った。教え子の学者たちにも、立ち去るものがあり、懸命の助力を惜しまないものがあつた。教育の場を取り巻く名誉欲、金銭欲のぶつかり合いをみた。社会の汚れた側面をみた。仮面の下に隠された知識人、財界人、学者たちの心ものぞいた。さまざまな思いのなかで、とにもかくにも、大学はできることになった。

3 喜びの書状

巻紙に毛筆の挨拶文

大学の創設が正式に決まった。建学に尽力してもらった人たちに、報告を兼ねて挨拶状を送った。巻紙に毛筆でしたためている。

『謹啓 立春を迎えて漸く寒気も和らぎました昨今 貴堂愈々御健祥の事と拝察およろこび申し上げます かねてから格別に御厚配にあづかって居りました京都産業大学については御蔭をもちまして このたび文部省より正式に法人認可と併せて大学設置開校の認可を得る事が出来早速開学の運びとなりました 偏へに貴堂の御支援御教導の賜ものと深謝申し上げます 偶々学生急増の機に際会致しましたが審議も極めて慎重でありましただけに大学開設後の運営は勿論学生の教導に就ては万全を期して皆様の御負託に背かざるやう努める所

存で御座います 幸にして関係方面よりは設立の場所の環境教授陣容の整備について好評を得て居り現在志望学生の応募状況も順調に進んで居る事を御報告申し上げます 認可を得ました機会に厚く御礼申上げ今後とも何とぞ御指導御鞭撻を仰ぎたく御挨拶申し上げます 乍末筆余寒も厳しい事もあるかと存じ御自愛御健勝を祈申し上げます

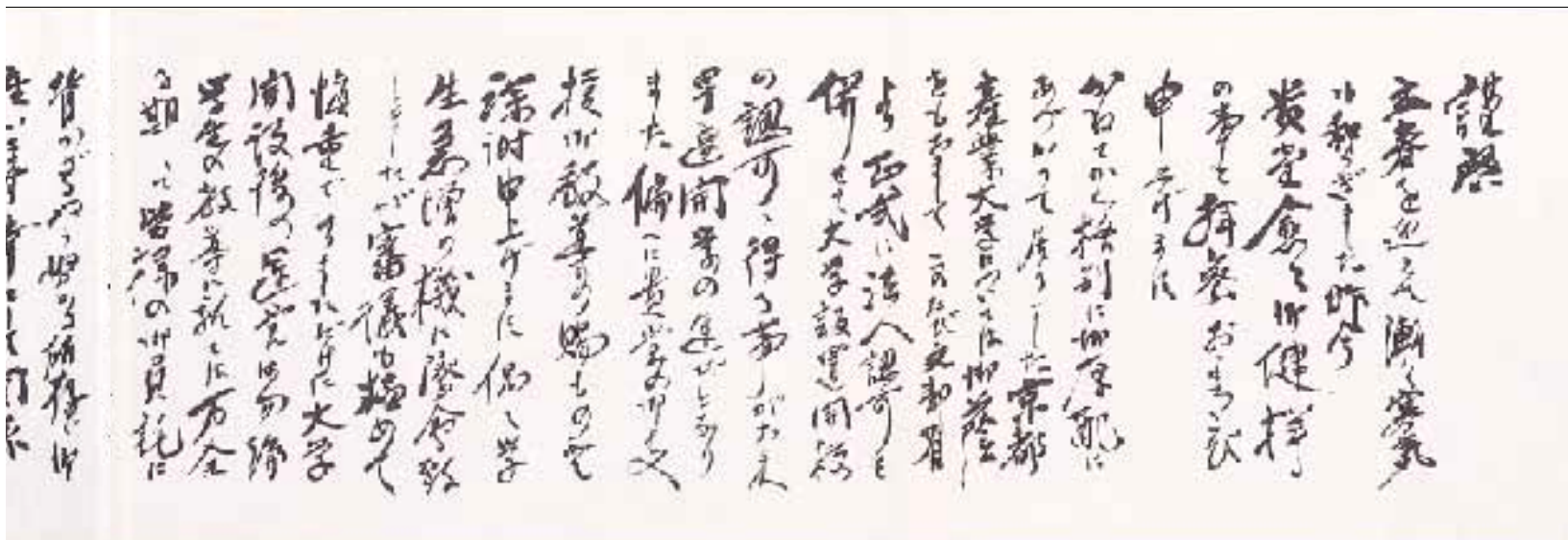
敬具

昭和四十年二月五日

京都産業大学 理事長 学長 荒木俊馬』

志願者溢れて

文部省の認可(内定)がおりたのは、昭和39年12月18日。開学まで3カ月余であった。それまで学生募集については身動きもならなかった。認可申請と大学の基礎固めに奔走する先生にとっては、



学生の募集に割く時間はきわめて少なかった。

いくら建学の理念が気高くあろうとも、どれほど立派な施設と教員陣が揃っていたにしても、私立大学は学生抜きに存在し得ない。受験生、それも良質の志願者が期待された。新設の私立大学である。偏差値が高くなくてもそれは仕方がない、構わない。受験勉強に疲れ果てた応募者はいない。磨けばキラリと光る原石探しを急がなくてはならなかった。待っていても、だれも入試要項を取りに来るわけではない。先生は、小野や芝原ら建学仲間と手分けした。

開学の年に入って、高校長や進学主任への大学説明会を連日のように開いた。京都、滋賀、奈良の三府県の高校への説明会。京都市内のホテルで開いて、バス二台に分乗してもらい、本山の工事現場へ案内した。大学の姿はまだおぼろげにしか浮かんでいない。名門ゴルフコースの京都ゴルフ場北東の本山では、ブルドーザーがうなりをあげて木ごと大地を切り拓き、キャンパスを造成していた。丘の上には四階建の本館の骨格が姿を現わしていたが、キャンパスらしさは見えない。ただ大学づくりの熱気を強烈に漂わせていた。翌日は大阪のグランドホテルに大阪、兵庫の高校長、進学主任への説明会。現地入りは無理だから建学の精神の披露と、充実した教員陣の説明が中心。次の日は島根県に向かい、県下23校の先生方に説明会。山陰地方の教育界に顔の広い小野の出番であった。マスコミへの宣伝も大切である。京都市内の教育担当記者を招いて建学の目的、精神などを

伝えた。

『本日の願書120通』(3.18)などのメモが、志願者の動向に神経をとがらせる俊馬先生の心中をみせている。

『大学の名前を宣伝する時間の余裕がまったくなかった。初年度は300人も受験して来れば大成功。そう思っていたら受験生は意外に増えた。千代田生命ビルの事務所に詰めていた創立メンバーは驚き、喜んだ。最終的に郵送の願書が800通を超し、このうち700人が受験した』という。

初めての入学試験

学校法人京都産業大学寄附行為の正式認可は、昭和40年1月25日。東山高校の推薦入学志願者の面接直前であった。推薦のあとは入学試験。雄豪が東京で印刷させた厳封の入試問題を古いペンツで持ち帰ったのは試験の前夜遅くという綱渡り。

完工間近の学舎では、まだ試験を実施できない。入学試験会場は、東山学園を借りた。開学時に着任していた田村洋幸(現・教授)も、試験当日、「国語」の責任者として、東山学園に出掛けた。採点についても東山学園の教諭陣の力を借りることになっていた。東山学園の先生方の献身的な応援がなければ、入試が順調に進まなかったであろうことは推測にかたくない。徹夜の採点が続いた。

『経営上からいえば、全員に入学してほしい。だが先生は、厳格に合否ラインを引いた。第一次試験の100人近い不合格者の名簿は、何としても優すことのできない大学の良心を示していたとい



諸君は同志だ、一緒に立派な大学をつくろう。先生は初の入学式で、そう呼びかけた(昭和40年4月21日 京都会馆第1ホール)

えよう。合否の判定会議の終わったあと、俊馬先生はひとり、机に向かった。墨をすり、静かに毛筆を運んだ。合格者発表用の名簿を自ら書いた。ひとりひとりの名前をたしかめ、頭にたたきこむかのように、あるいは祈りを込めているかのようにも見えた。まさに、この合格者たちの将来に、京都産業大学の運命を託すのである。雑務であわただしい準備室のなかで、先生の一角にだけは、不思議な静けさが漂っていた(『田村洋幸著『生と愛のパスポート』昭和51年刊から引用・抜粋)のであった。

開学の直前の第二次入試。本館がなんとか間に合った。初年度の最終入学者は推薦、一次、二次入試をあわせて697人であった。予想もなかった受験者数であり、期待を上回る入学者を迎えることができた。なぜか。先生の述懐をみよう。

『教育研究施設も教職員の組織も未完成、受験生の目にはいかにも貧弱に映ったであろう。入学した学生たちが、自主的に本学を選んだケースもあろうが、保護者の方々が建学の精神と教育方針に賛同して本学に子弟を託すことの安心感をもって入学をすすめたケースが多かったのではない。教職員、学生は一体になって理想の総合大学を自分たちの手で創り上げようという意気にもっていた。フロンティア精神である。この軒昂とした精神力に基づく全学の一致協力があったからこそ、わずか数星霜で、本学は先例のないほどの驚異の大発展をとげたのである(『サギタリウス「本学の創設を顧みて」』昭44.2抜粋)』

4月1日、京都産業大学が息吹き始めた。勢揃いした教職員の全員50人。ひとりひとりに辞令



京都産業大学初の大学要覧。建物の写真が間に合わず建築模型を掲載した



を渡した。苦楽をともにすることになる同志たちである。先生が昔から通い慣れた平八茶屋(左京区山端)に全員を呼んでの招宴。『祭酒・荒木俊馬』の誕生でもあった。

鞍馬街道

昭和39(1964)年初夏、大学ができるのかどうか、まだわからなかったが、とにかく俊馬先生から教養部で英語の講義を担当してほしいと頼まれた青井末治(京都産業大学名誉教授)は、キャンパスをとりあえず見ておこうと洛北の本山を訪ねた。上賀茂神社の裏から名刹鞍馬寺に至る鞍馬街道は、当時はデコボコの地道で、京都バスがときおり土煙を巻き上げて走って行く。鞍馬行のバスを市原まで乗って、キャンパス用地は何処かと目を皿にしたが、それらしい場所は見つからない。



開学式典の先生の挨拶(昭和40年11月27日 未完成の1号館)



京大の教え子であるノーベル物理学賞の湯川秀樹博士も祝辞を述べた



開学当時の通学風景。ボンネットバスが懐かしい

帰りは徒歩で探した。強い太陽の光を避け木陰伝いに京都ゴルフ場入口まで戻ったが、ついに見つけることができなかった。ゴルフ場を包む雑木林と田畑が広がり、人の姿もない。車もめったに通らない。セミしぐれのなかで、首をかしげながら荒木先生の自宅へ向かったのであった。

キャンパスに学生、教職員をピストン輸送する京都バス、市営バス、大学のシャトルバスで車ラッシュ、往来の激しいいまの姿からは想像を絶する思い出話である。

本館の一棟がまず完成した。四囲の洛北の景観を壊さない白い四階建。京都産大の第一期生の講義室と、迎える教職員の研究室、事務室が小分けされていた。

雨の日が大変であった。通勤通学の道は、上賀茂神社から柘野岐れを経て本山まで、どろどろにぬかるんでいた。車が通るたびに、飛沫を避けて、大急ぎで田んぼのなかへ走り込むのである。一瞬、遅れると背広も学生服も泥だらけ。

晴れの日が、通勤通学の楽しい道かといえば、とんでもない。木材、石材を積んだ大型トラックの土埃で、服は薄い膜を張る。

開学の前後の教職員の事務量は膨大である。みんな半徹夜で仕事をこなす。しかし帰りのバス便はとっくになくなっている。帰り道は人通りの途絶えた暗い道。洛中へ向かうクルマをみつけると、

女子職員だけでも乗せていただけませんか、とお願いして、しのいだ。

ある夜更け、ヘッドライトに向かって手をあげたら、真新しいベンツが止まってきて、足の便の良い所まで送って下さった。あとで、本山の少し奥にある川島織物の社長さんの親切とわかったという。地元の人たちの温かな心に触れながら、京都産業大学は力強い産ぶ声をあげた。

馬術部の発足

「講義のあいま、食堂はまだなかったから昼食の弁当を本館三階の教室で広げると、銀バエが飛んで来る。北側の崖下、いまの10号館のあたりに厩舎があって、馬がたてがみを振って追い払うと、たかっていたハエの群れがこちらへやって来る。臭気にも悩まされた一期生の話である。昭和40年春、開学したときには、学舎らしい建物は鉄筋四階建の本館だけ。赤い地肌を剥き出した北側の空地を、馬術部が占めていた。開学のあと、その京都産業大学馬術部はたちまち日本の学生馬術界の頂点に駆け上がった。新設大学の広告塔の役割を果たし、活躍に引っ張られて体育会クラブや文化クラブの部活動が盛んになる。キャンパス全体に活力をみなぎらせる原動力になった。

優れた指導者がいた。俊馬先生の長男、雄豪である。父とともに建学に参画し、定年で名誉教授になったあとも、平成13年現在、保健体育の非常勤講師として馬術部の指導監督にあっている。創部してすぐ、全日本学生馬術の選手権などで優勝し一躍、脚光を浴びたのは雄豪の指導の賜物であったことは言うまでもない。

ローマ(1960)、メキシコ(1968)のオリンピックに日本代表選手として、あるいは選手兼監督として出場した雄豪は、昭和の曲垣平九郎と呼ばれた。「関西の馬術界からオリンピック選手を送るのは、



本館下(現在の10号館のあたり)のグラウンドを占めた厩舎。馬術部はたちまち国内の大学で連続優勝して本学の名を広めた(左)。上の写真は障害飛越で日本記録を出した雄豪教授

戦後、この荒木さんが初めてである。特徴のあるヒゲづらは、馬をやるほどの人で、知らぬ人はもうないぐらいに通っている。ちょっと見はきついようだが、顔をほころばすと、とても人なつこい感じになる。いったん決めたら絶対にひっこまない一徹ものだが、すこぶる純真でにくめない人柄。国体や全日本で(何回も)優勝。いまも京大理学部の大学院に籍を置き、構内の馬小屋に住み込んでいる。荒木さんの強味は自分で馬を訓練していることだ。人が仕上げた馬にそのまま乗っているのとは違う。だから馬の調子はすぐわかるし、悪い点を見きわめて直すこともできる。技術面では日本の第一人者」(朝日新聞 昭和35.5.2 月曜訪問欄から)

京大三回生の昭和22(1947)年、国体へ初出場初優勝、26(1951)年の国体馬場馬術、26年の全日本六段飛越、32(1957)年の全日本複合馬術、34(1959)年の国体複合馬術、各優勝などの戦績が光っている。「豪快な飛越に期待」「馬術は芸術なり」などの見出しで、報道されたとおり、日本馬術界の頂点を極めた名手である。

俊馬先生は、京都産業大学の創設者総長として、学生に接するとき、わが子のように懐に抱きすくめた。その性格を素直に受けついで雄豪もまた、学生たちに父と同じように接したが、馬との生活にも、その優しい心菜えがにじみ出ていた。

戦後の食糧難時代の京大馬術部は、馬の餌を手当てすることが難しかった。京大馬術部員の先頭に立ってカイバの確保に奔走した。馬車を曳いたり、競馬場のアルバイト。雇ってもらった京都の淀競馬場で、カイバを分けてもらい、伏見の酒屋さんから焼酎の搾りかすを集めて帰ったり。人馬一体の妙技の背後に、愛馬とともに歩んだ生活があった。「馬はぼくの子供だよ」雄豪の言葉である。

俊馬先生は、馬術にだけ関心を持っていたわけ

ではない。運動や文化の課外活動の展開に熱心であった。課外活動というのは、正課教育に対する、課外教育活動の略である。教室の授業の枠外で、自主的に自己の人間形成に努めて大学教育を補完する役割を担っている。人格の形成をめざすのであるから、スポーツに励む学生は心身ともに重視しなくてはならない。スポーツは術や技の習得を眼目にするのではなく、柔道、剣道という言葉の示すように「道」を求めることが大切である、と先生は体育会機関紙「紺青」で力説した。

『諸君、道を学べ』。京都産業大学は社会の指導的人材を育てる大学である。だから、将来をみつめて胸を張って4年間を送ってほしい。永い伝統をもつ他大学を蹴散らすような覇気を持つてはないか。秋の市中パレードが開学のあとの京都産大の名物行事であった。応援団旗、部旗を掲げて、京都市役所前から河原町通り、四条通りを八坂神社へ行進した。先生はいつも沿道で、笑顔で手を振って見守った。

コンパ

先生は、学生が好きであった。学生もまた、先生のそんな思いに応えた。コンパがある。幹事が吉田山の麓の総長宅へ出掛ける。「おーい、酒を持って来なさい。学生が待っているんじゃ」妻の京子が包んだ一升瓶をぶら下げて、嬉しくてたまらない顔でコンパの席に着く。大いにしゃべり、遊びの誘いを受けて立った。観電元田中駅前の「天寅」。安い、うまい、量たっぷりだから、学生のコンパ会場として知られている。この玄関に卒業生たちと一緒に笑い転げる先生の写真がある。わが総長に野球拳を教えている名物仲居さんの姿が懐かしい。酒豪で聞こえた飲みっぷりは、若い学生にひけを取らなかった。川端二条の「赤垣屋」にもよく出掛けた。揮毫を頼まれると「祭酒・荒



コンパで卒業生たちと一緒に遊ぶ荒木先生(天寅で)

木俊馬」としたためた。後年まで「祭酒」を雅号と信じたものがいたが、雅号は「嘯山」。天文学者の意味であった。

学生と話す機会を逃さないように努めた先生。宴席では優しかったが、学内では厳しかった。総長が車で外出しようとして本館前に姿を現わした。応援団の学生たちが、そこにいた。親愛な先生をみつめて「オス」。大声で挨拶したとたんであった。先生が血相を変えて、怒鳴った。「オスとは何じゃ、師に対する言葉か」と言う。先生のカ

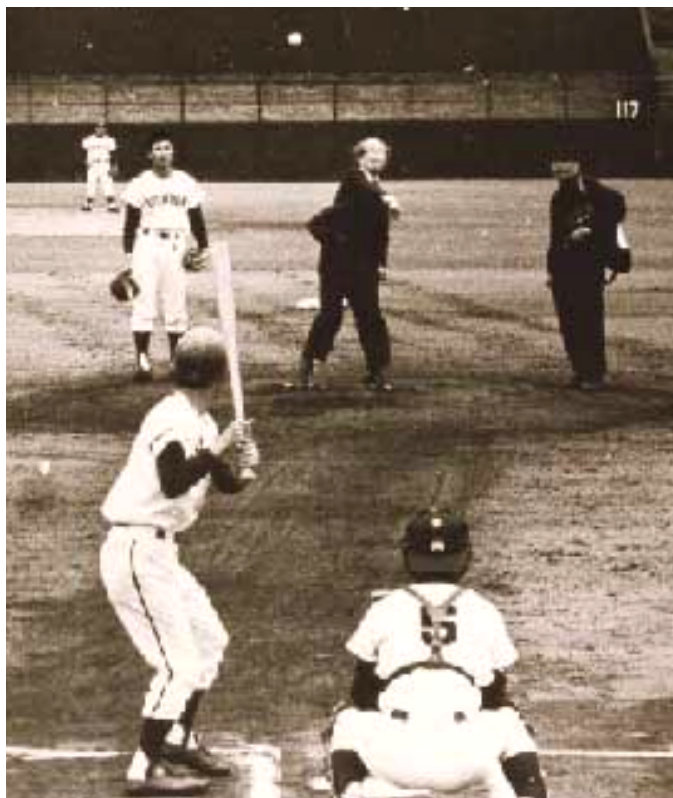
ン違いであった。オスが「押忍」であり、何ごとにも堪えようという掛け声であって、決して「おはよっす」を略したような粗雑な言葉遣いではない。見送りに出ていた職員が、そう説明して懸命に怒りを鎮めた。「おお、そうなのか」。破顔一笑。済まないという表情で車中におさまった。決して総長室のなかで孤高を保つような先生ではなかった。学生とがっぷり取っ組み合って、一体になってキャンパスライフを楽しもうと心掛けていた先生であった。



京都産大名物の市中パレード。先生は沿道から交歓の手を振った



学生の熱気で神山祭の火文字が揺れた



京滋リーグ会長として始球式に臨んだ先生

4 次の世代への贈り物

コンピュータ

先生は、世界の科学技術の動向を注意深く見守っていた。コンピュータ時代の到来をいち早く予測して開学の直後から導入とその活用に熱心であった。

だから京都産業大学のコンピュータ教育は、国内の大学のなかで最も早い時期に始まり、IT革命の新世紀が始まった現在まで、わが国のコンピュータ教育の先駆的な存在であり続けている。「教育研究へのコンピュータ運用」「情報環境の整備」「大学事務システムの開発」と続き、いま学内には高速コンピュータ・ネットワーク・システムKING

(Kyoto Sangyo University Information Network for General System)が張り巡らされている。高性能UNIX Enterprise 3000などサーバー群が設置されワークステーションとパソコン群を結ぶクライアント・サーバー・システムが構築され、電腦キャンパスをつくりあげている。開学直後の昭和42(1967)年、宮野高明(京都産業大学名誉教授)は、悩んでいた。京都大学へのコンピュータ導入を研究していて、フランスへ留学。馬術部の先輩であり、馬術の師でもある荒木雄豪から強引に京都産業大学へ引っ張られた。「これからはコンピュータの時代だ。学生に教えてやってくれ」「君にまかせる」と俊馬先生。ただひとつの条件は「日本の企

業の機械を選べ」であった。

さっそく機種を選定に入ったが、最終的に「HITAC -5020(日立製作所)」「TOSBAC -3400モデル40(東芝)」が導入機種の候補として残った。問題も残った。予算が1億5,000万円。これでは、TOSBACは買い取れない。レンタル方式という別法はあるが、宮野としては京都産大のさまざまな用途に対応できるように、次々と変更を加えて行きたい。そのためには機械を丸ごと買い取らなくてはならない。そうはいっても、できたての大学である。資金に余裕のないことは予測できた。しかし... HITACはIBMの7090に対抗して日立が開発した日本の名機であって、完成度は高いが将来性について確信のもてる機種とは思えない。事務処理能力でTOSBACの方が用途に適している。それに京都大学ですでにK・Tパイロットとして扱い、性能の優れていることは確認済みである。いわば次世代へ向けた新機種であり、京都産大とともに機械の能力を引き出そうという意欲をみせている。

逡巡する宮野に対して財務を取りしきっていた小野良介がズバリと聞いた。「いくら必要なのか、すかさず」倍。倍ほしい」と宮野。かたわらでこの

やりとりを聞いていた俊馬先生は即決した。『必要なだけ出そう。大きな買い物だが、日本の次の世代を担う人たちへの私たちの贈り物だから』

宮野は感激した。大学をつくって無難に経営をこらせて行けばよい、というような人たちではないことを覚った。『日本の次代への贈り物』。しかも俊馬先生は『機械のことはまかせる。潰しあって構わんから、思ったとおりに使ったらいい』とまで言い切ったのであった。

ホストコンピュータは決まった。これから活用するための設備をととのえる。操作と開発のできる人材を集める。大学の教育と事務への応用を考え出す。京都産大でTOSBAC -3400をつかって、具体的に展開して行く方策のすべてをまかされて、宮野は武者ぶるいする思い。

もうひとつ、宮野をふるい立たせる提案が先生から示された。『全学にTSS(Time Sharing System)の端末を入れよう』というのである。理系だけではなく、すべての学部学生にコンピュータを思い切り使わせようじゃないか、という計画であった。コンピュータの分野で国内の大学の先頭にいた京都大学に優る、新機軸であった。「あの頃、京都産大はわが国の大学におけるコンピュータ教育の



情報時代の到来を先生は予知し、コンピュータ教育に力を入れた。写真は導入されたTOSBAC-3400

最先端にいた。恐らく関西の私大に比べて、10年間は前方を走っていた」と宮野。昭和45(1970)年、OECDの教育調査視察団が来日、国内の先駆的な4大学のコンピュータ導入状況を見学に来たとき、関西では京都大学と京都産業大学が訪問先になった。コンピュータ教育の実績が評価されたこと、建学の精神が文部省から高く評価されていたことを示している。

TOSBACがやって来た。入試事務など事務処理と図書館業務、人事管理に使う。まず入学事務の処理がコンピュータ化された。志願者、合格者、定着者のファイルをつくり、試験成績を記入し、合否判定や合格者発表に使った。「便利なもんやなあ。教職員は、コンピュータの威力に目を見張った。

京都産大のコンピュータの歴史をたどると「日本最初」の出来事が並んでいる。

<教育> 応用数学科(計算機科学科)新設 昭和44年4月 学内公開講義(計算機学習講座)開設 昭和44年4月 理学部ターミナル教室開設・TSSによる学生実習開始 昭和51年10月

<研究> 私立大学図書館総大会においてオンライン・カタログのデモ 昭和53年7月 光ファイバーとTDM(Time Divided Multiplexer)による学内ネットワーク敷設 昭和56年6月

<業務> 図書館 洋書目録作成 昭和43年2月 発注・受入業務 昭和43年5月 教務受講登録 昭和45年4月 成績管理 昭和45年9月 バーコードによる貸出 昭和51年9月 バーコードによるオンライン貸出 昭和53年9月 オンライン・カタログ事務開始 昭和55年10月

世界問題研究所

コンピュータ教育とともに、開学期の先生が京都産大発展の基盤として充実に力を注いだのが世界問題研究所であった。昭和41(1966)年春、大学の附置研究所として発足した。「世界に開かれた、日本の新しい大学像」をめざす、建学の精神に基づいていた。初代所長は岩畔豪雄。研究員は若泉敬教授(二代目所長)ほかに女子職員一人というささやかな陣容であったが、岩畔は「この名称なら森羅万象を研究できる」と張り切った。

新しいミレニアムが、そう遠くないところまで来ていた。世界は、歴史的な転換期に入っていた。情報通信と交通手段が発達し、経済面での国と国との関係がいつそう緊密になって来た。地球は狭くなり、公害や核の脅威は、世界をひとつの運命共同体にまとめて包み込んで来た。環境。資源。人口。南北問題と経済秩序。それに宗教や人種の対立がからみ合う。どれをとりあげても、運命共同体の存立基盤を揺るがす難題である。

こうした人類史の大転換期にあって地球の未来を考察しようとするれば政治、軍事、経済、文化、思想、科学、技術などさまざまな領域の個別の研究を深めたうえで、総合的な見解をめざす必要がある。大切なことは、京都産業大学百年の大計を先生とともにつくっていく頭脳としての働き。それがこの研究所の使命でもあった。そのために「世界問題」という巨大なテーマを掲げる研究所が動き出したのであった。

初仕事は、国際的に知られた碩学の招聘。また昭和47(1972)年から3年間は、基本テーマ「学問の将来と大学のあり方」を掲げて学内全学部から延べ27人の教員の参加で、共同研究会を催した。月一回の定例研究会であり、建学の精神の現代的



OECDの教育調査団がコンピュータ教育の最先端に行く大学として本学を訪れた(昭和45年1月)



な展開についても熱心に討議が重ねられた。

さらにテーマ「世界秩序の形成と新学問体系への展望」についての研究を発表するなど、本学の建学の精神をつねに見つめなおす役割を帯びて来た。

綱紀厳しく

大学紛争が国内の大学を揺さぶった。産ぶ声を上げたばかりの京都産業大学にも波及した。7号館は、クラブの自治に委ねられていたが、昭和44(1969)年、過激派学生グループが活動の拠点として占拠しようとした。これに怒った一般の学生たちが突入して、封鎖学生たちを追い出す7号館事件が起きた。

5月7日の部局長会議が、東大安田講堂に籠城して大学・警察と対立してたてこもった事件に加わったとして捕まった京都産大生二人に対して、退学処分を決定。抗議する学生運動家たちが処分撤回の学生集会の開会を図った。大学側は、学園紛争を引き起こした場合は、機動隊を導入して断固、排除すると宣言した。登校する学生たちにアジるもの、授業を受けることが大切だと反発するもののが飛び交った。

吉田中大路の先生宅にも脅迫の電話。昼も夜も掛かった。本学学生には脅迫電話を掛けて来るような卑怯な者はいない。よその大学生に違いあるまい。そう考えた先生は『別に驚かず』と悠然と構えた。

大学は、研究と学問の場である。大学は、その限りにおいて、最大限の自由を保障されていなければならない。しかし、治外法権でもない。研究

と教育の場を脅かすものがあれば、権力の側であろうが、学生運動であろうが、断固、排除する。それが先生の基本的な姿勢であった。大学を権力の象徴だ、として打倒を図る過激派の図式は、先生の理解を超えるものであった。

この大学は創られたばかりであり、いま伝統を築きつつある。わが大学のどこに、打倒しなければならぬ、因習の濃い権力が巣喰っているというのか。先生はもとよりのこと、おおかたの教職員、学生たちにとっても自分たちが力の限りにつくり上げようとしているキャンパスに入り込んで来て勝手な理屈をつけて占拠だ、封鎖だと騒ぐ他大学の学生たちに嫌悪感を持っていた。他大学の学生に呼応する学生は、もはや同志ではないとさえ、言い切る学生が大勢を占めた。

『公示=(学生二名の学生証番号、所属学部学年、氏名)両名は理由書のとおり本学学生たるの本分に反する行為があったので宣誓書ならびに学則により退学に処す。

理由=昭和44年1月19日まで、東京大学の研究室教室などを不法に占拠し、不当な要求を掲げて大学の自由と自治を脅かし暴力を用いて研究および教育を妨げ建物、研究設備などを破壊し、よって同大学の秩序を混乱に陥れ機能を麻痺させ、また社会人心に不安を惹起させた学生集団に両名が加わっていたことは、本学学生たるの本分に反した行為であると断定し、慎重審議の上、処分を決定した。

昭和44年5月8日 総長 荒木俊馬』



今日出海・初代文化庁長官(左)は開学間もなく本学の教壇に立った。写真(下)は今教授を紹介する荒木先生



熱い思い

京都産業大学の草創期、著名な学者、異色の人材がキャンパスに顔を揃えた。文化勲章の岡潔、文化庁長官でもあった作家の今日出海、科学評論の桶谷繁雄ら、その動静がマスコミに伝えられる著名人が少なくなかった。広告塔にしようというわけではなかった。先生の教授探しは真剣勝負であった。話題づくりなど念頭にない。学界の巨星の醫咳に学生たちが接することによって得られるに違いない心のときめきに期待しようというのであった。

「君は、学生が好きか」。教員志望のひとに、そう尋ねる先生であった。理想の教育の実現には、まず教育に情熱を持った教員が欠かせない。それに、磨けば光る原石。大学は磨き砂を用意する。学生たちの心を揺さぶるに足る巨星たちへの思いが、開学にあたっての教員集めにみられる。

たとえば数学の岡潔教授。『奈良の自宅まで送り迎えを条件に承諾』という記述が俊馬日記にある。岡教授は奈良市の在住。先生は文字通り三顧の礼でこの文化勲章受章の碩学を教授陣に迎え入れた。先生は岡の出講日には必ず出学して総長室で話をきいた。岡は昭和53年3月、先生より少し早く世を去った。

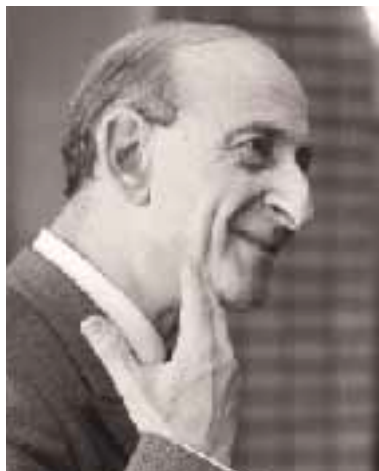
今日出海は東京から定期的に出講していた。昭和43(1968)年6月6日、今教授の芸術論講義を学生に混じって先生が聴講していると、新聞記者がカメラマンと一緒にやって来て、周りが騒がしくなった。初代の文化庁長官に内定したという。長官の職を去るまでの間、講義はなくなったが、先生との交遊は、続いた。長官室を訪ねたり鎌倉の

自宅に出掛けたり。『今さんに招かれる、茶の間夕食会。今家全家族とラインワイン。12時半まで雑談』(昭51.1.15、俊馬日記)と、楽しそうな記述がある。

国際政治学の若い論客、若泉敬も草創期の著名教授のひとりであった。三回り近く年齢の離れた先生であったが、若泉とはウマがあった。たびたび一緒に海外へ渡航した。昭和50(1975)年7月、激務の間を縫って、ナイヤガラ滝を一緒に見物した。観光客で賑やか。快晴。滝のしぶきが霧雨のように降ってくる。裸になって海水浴気分を楽しんでいる人たちがいる。珍しい光景に満足して、パツファロー空港へ戻る車中のこと。運転手が景色や建物の説明をするたびに「あなたのお父さんに説明してあげて下さいよ」と若泉にいう。『ユア・ファーザーと言っているのかね。いよいよ君は、オレの息子になったわけだ』と大喜び。息子と乾杯しよう、とはしゃぐ先生であった。若泉教授の横顔を追ってみよう。

『コードネーム「ヨシダ」...佐藤総理の信任状を懐に、特使としてキッシンジャー米大統領補佐官と秘密裏に折衝を重ねた筆者(若泉)の使命は何だったのか? 沖縄の祖国復帰を契機とする「日本再独立の完成と日米関係の再構築」を願いつづけ、ここに四半世紀の重い沈黙を破る』(若泉敬著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』1994年文藝春秋刊の帯広告から)。ヨシダは若泉である。昭和45(1970)年の日米安全保障条約の更改を控えて、日米間最大の懸案は、沖縄の返還問題であった。

昭和27(1952)年4月、連合国による対日平和条約発効。沖縄について潜在主権が日本にあること



レイモン・アロン氏
Raymond Aron

昭和45年来学、フランスの哲学者



カール・D・エルドマン氏
Karl Dietrich Erdman

昭和46年来学、ドイツの歴史学者



ポール・A・サミュエルソン氏
Paul Anthony Samuelson

昭和46年来学、アメリカの経済学者、
ノーベル経済学賞受賞

が確認されたが、当面は米国の施政権下に置かれることになった。1965年、本学創設の年に沖縄入りした佐藤首相は、沖縄の復帰が実現しない限り、わが国の戦後は終わらないと声明した。しかし冷戦構造のなか、米国にとって沖縄は重要な軍事基地であった。核兵器が置かれていた。返還に応じたとしても、その後も「核」を置き、あるいは自由に通過させる権利を持ち続ける必要があった。とはいえ核兵器による攻撃を人類で初めて受けた日本である。核アレルギーの国民感情は「核抜き返還」を求めるであろう。日米首脳による沖縄返還交渉の中心の難題である。しかも核の存在や核の通過については、軍事上の機密事項である。たとえば返還後の両国が核の通過や存在を認めるかどうか、協議の対象にすることはできない性質の事柄である。

「オキナワ」処理の詰めにあたって、正式な外交ルートでは詰めへ向かっての動きは恐ろしく鈍かった。両国首脳の意思疎通の要になる橋渡し役が必要であった。重要で微妙、しかも絶対隠密裏にことを運ぶことができなければ、会談の成功はおぼつかない。ときの総理佐藤栄作の信任状を懐に、若泉は1967年から1969年にかけて、米国大統領のジョンソン、ニクソン両大統領のもとに向いた。

若泉の仕事はふたつ。ひとつは佐藤・ジョンソン会談(1967年)において、沖縄を「両三年のうちに返還するという目処付けについての文言の調整」であった。もうひとつが佐藤・ニクソン会談(1969年)において、返還の際の「核」の取り扱いについて、両国首脳間の密約文書をどのように扱うか、であった。



昭和41年来学した林語堂博士は「近代科学と陰陽哲学」のテーマで講演した

表向きに決まったのは核抜き、本土並み、1972年返還だが、外交の舞台裏で交渉役を務めた若泉教授は、次のような秘密文書の存在を『他策ナカリシ...』で明らかにしたのであった。国際政治の証言者として、佐藤首相の亡きあとに書き記して国民になんとしても知らせておかななくてはならない。若泉の心の奥からほとばしり出た「信念という宝石」の輝きがそこにあった。秘密文書の概要は次の通りであったという。「米大統領...日本を含む極東諸国の防衛のために米国が負っている国際的義務を効果的に遂行するために重大な緊急事態が生じた際には米国政府は日本国政府と事前協議を行ったうえで核兵器を沖縄に再び持ち込むこと、及び沖縄を通過する権利が認められることを必要とするであろう。かかる事前協議においては、



ゲオルギ・A・アルバトフ氏
Арбатов, Георгий Аркадьевич

昭和47年来学、ソ連の歴史学者



ルイス・ディエス・デル・コラル氏
Luis Diez del Corral

昭和47年来学、スペインの歴史、哲学者



C・F・フォン・ヴァイツゼッカー氏
Carl Friedrich von Weizsäcker

昭和49年来学、ドイツの物理学者、自然哲学者

米国政府は好意的回答を期待するものである。さらに米国政府は、沖縄に現存する核兵器の貯蔵地をいつでも使用できる状態に維持しておき重大な緊急事態が生じたときには活用できることを必要とする。

日本国総理大臣...重大な緊急事態が生じた際における米国政府の必要を理解して、かかる事前協議が行われた場合には、遅滞なくそれらの必要を満たすであろう。1969年11月21日」

裏交渉を引き受けた若泉はあるとき決断を容易に下そうとしない佐藤栄作にいう。「国家百年の大計について深く静かにお考えになって下さい。総理のご判断一つに日本の命運が賭けられているのですから。私自身も、自分の人生において、総理から与えられた今回の仕事をもっとも重要な意義のある使命と考えて、命懸けでやるつもりです。もちろん何の代償も求めています（『他策ナカリシ...』から）」

ひとは心のなかに輝く宝石を持っている。人生において、妥協はつきものであろう。しかし、心の宝石から輝きを奪うような事態になったときの行動は決まっている。若泉はこのとき、宝石の輝きを大切にすることだけを願っていた。

「私は何ものをも、もとめない」という若泉は、その言葉に忠実に生きた。戦後の日本において最大の難題の解決にあたり首相の絶大な信頼を得ていたのに、この日米首脳会談の舞台の幕がおりるのにあわせて京都産業大学での学究としての生活に戻り、社会的な名利をもとめようとは一切しなかった。自らの人脈をつかって、あるいは国際政治学者、評論家としての力を発揮して世界の碩学を大学に招いた。研究と講義、京都産大の発展の土台づくりに没頭して、ありあまる情熱を本山のキャンパスにぶつけた。政治の舞台に再び、姿を見せることはなかった。定年を前にして健康上の理由から退職した。退職金のすべてを本学に寄付した。本学の発展をひたすら願って、故郷の福井県へ淡々として、去った。

具眼の士

若泉の著書にいくつかのエピソードが紹介されている。草創期の京都産大の姿を知るうえで、記録にとどめたい光景である。あるとき若泉は、佐藤総理の意向を伝えるために、急遽、ホワイトハウスへ向かうことになった。昭和42(1967)年11月9日。なんと、アーノルド・トインビー博士を横浜港に迎えた日である。俊馬先生らとともに旧

洛北の本山一帯に広がる京都産業大学のキャンパス。創設時の本館を核に機能的な配置は一拠点総合大学の魅力を光らせている。写真の中央から少し左側に、縦に走る道が鞍馬街道。上方の左右（左方がほぼ北の方角にあたる）に、叡山電鉄鞍馬線沿いの街並みが開けている。空撮・平成16(2004)年現在



知の博士を宿舎に案内したあと若泉は幼時から可愛がってくれた叔父が亡くなったので故郷に帰ると説明して姿を消し、深夜の便で渡米した。著書『他策ナカリシ...』に、次のような述懐がある。

『京都産業大学初代総長の荒木俊馬氏、理事長の小野良介氏、世界問題研究所初代所長の岩畔豪雄氏に対して抱く私の深甚な感謝の念...このお三方より(交渉のころ)いただいたご理解と有形無形のご支援は、私の極めて特殊な使命を果たすうえでの貴重な助けになった...暗黙裡で見守るといふモラルサポートであった...お三方とも、それぞれに勘の鋭い具眼の士で、いわば以心伝心、ある程度までは(私の任務について)推察しておられたと思われる』

俊馬先生をはじめとした大学首脳陣は、抜群の力量を持つ教授陣が、それぞれの行動半径を広げて行くことについて黙認し、あるいは支援したようである。

いうまでもなく、教授たちが国際社会に大きくはばたいて行けば、その体験や成果が、きっと学生たちに反映され、教育に役立つと信じて疑わなかったからであろう。教授陣の世界への雄飛を見守った首脳陣の力量もまた、本学の発展の基礎を築いた。



「トインビーとの対話」で、博士の壮大な歴史観を鮮明に引き出した京都産大の若泉敬教授



京の知名士の集い『丁酉会』の友情「ていゆう」は「ひのととり」である。明治30(1897)年生まれで、京都の各界で活躍していたひとたちが、ひたすら親睦を重ねることを目的にして昭和12(1937)年、みんな40歳の不惑に達したのを機に結成された。荒木俊馬先生が中心的な存在であった。

発足間もない紀元2600年に祝賀会を開いた。メンバーは次の通りであった。荒木俊馬、蜷川虎三、梶田茂、片桐英郎ら京都帝大教授、助教授陣伊豆藏芳太郎(帯地業) 園部平一、辻重彦、佐竹吉兵衛(いずれも料理料亭) 京都府議会議員の中川喜久(長男和雄は、のちに大阪府知事) 陶芸家の楠部彌弌(文化勲章)ら。準会員として薄田美朝(当時の鹿児島県知事) 鈴木脩藏(当時の岩手県知事) 山内継喜(当時の陸軍司政長官南方派遣)らの名もみえる。

昭和13年、義父の新城教授が南京で客死したとき、俊馬先生は中川喜久府議に同行してもらって警察に出掛け、一刻も速く渡支の手続きが済むよう頼んでいる。また昭和39(1964)年春、丁酉会は俊馬先生に対して次の激励文とともに寄付金を贈って、僚友の前途を励ました。会員たちは古稀目前であった。「同志 荒木俊馬君は、目下、洛北の地に於て実業大学の創設に君が余生の全力を掛けて之が実現に邁進されつつあることを同志として慶ぶ者であります。各人金1万円。楠部彌弌からは作品2点の寄贈があった。先生にとっては何よりの励ましであったと思われる。



楠部邸の丁酉会で会釈を交わす先生(前左)

「大学之道八明德ヲ明ラカニスルニ在リ」開学式(昭和40年11月27日)で先生は、五経の『礼記』から「大学」の一文を引用して本学創設の意義に触れている。「古ノ明德ヲ天下ニ明カニセント欲スル者ハ先ツ其國ヲ治ム。其國ヲ治メント欲スル者ハ先ツ其家ヲ齊フ。其家ヲ齊ヘント欲スル者ハ先ツ其身ヲ脩ム。其身ヲ脩メント欲スル者ハ先ツ其心ヲ正ス……」という言葉を紹介、解説して『大学は人間形成の場である』と述べた。このときの先生の解説によると「大学」は、もとは王者の道を説いた内容であり、従って民主権の民主主義の現代に直ちにすべての言葉を当てはめることはできない。しかし、平和繁栄の国づくりをめざすのであれば、その国づくりを担うためには「明德」「格物致知」こそが精神の基盤であるべきである。真理を探求して正しい知識を身につけること。大学はそのための修練道場でなくてはならない、と説いた。開学のころ卒業生から記念の書をもとめられると、「明德」「格物致知」としたためる先生であった。